會議記録の最近事情

赤谷慶子

一九七〇年代日本に置いては國際會議開催著しく少なかりしゆゑ、同時通譯なる生業は日本にてはあらざりき。國際會議はことごとく英語にてなされたり。國聯本部には英佛西の同時通譯ありて、會議終了後數時間後にて完全なる議事録出でくる制度設置せられき。

しかれども、日本には英文議事録作成する女性數名存在し、彼らは英文記録速記者といふ生業を擔へり。十五分毎に四名の速記者交代に速記とり、事務室に戻りそをタイプライター驅使し紙に文字轉書すといふ作業なり。會議終はりてより議事録完成するまではほぼ六時間を要したりき。ゆゆしき作業なる事は明白なり。

昨今AIその作業瞬時行ふ。先日ある會合に片耳の聽力惡しき知人携帶電話を四人掛けの卓上に置き、それに目を走らせたりき。こは何ぞやと凝視すれば、會話の文字畫面に出で來るなり。げにこれぞ文字起こしかと豈驚かではあるべけむ。

過日、經濟・金融關係のさる研究會再開せらるるにより事務方に助力せられたしと依頼あり。この研究會は米國のノーベル經濟學賞の受賞者が設立し、主に「軍縮問題を考ふる會」なりき。ジェームズ・トービン、ローレンス・クライン、ケネス・アロー、ロバート・ソロー、アマーティア・セン、ジョセフ・スティグリッツ他、ジェームス・ガルブレイス、ロバート・マクナマラ、オスカー・アリアス等錚々たる學者連の作りし會なり。日本支部は濱田宏一・エール大學名譽教授が初代理事長にて現在は河合正弘・東京大學名譽教授なり。

ある課題につきて研究會數回を開催のうへ、政府に對して意見書を提出する豫定なれば、議事録作成は不可缺なり。以前のごとく資金潤澤にはあらねば、如何に低費用に記録をつくるべしやといふが今の惱みなり。AIによる文字轉書機器は必要不可缺にて、應用ソフトまた小型機器出回れり。何をいかに使へば最適なりや檢討すべく驅けずりまはれり。世の移ろひかくのごときかとひたすら茫然たるのみ。

（令和六年九月二十七日受附）